

猿新聞

編集責任者
山村 準

tel:0595-63-1725

Email

yun.y@asint.jp

名張鳥獣害問題連絡会

発行部数

【全戸回覧】

錦生地区：100部

赤目地区：150部

箕曲地区：70部

ひなち地区：220部

つつじが丘：440部

【全戸配布】

国津地区：380部

市民センター：90部

(9地区)

名張市議会：20部

名張市役所：20部

地域で取り組む シカ・イノシシ対策

シカやイノシシによる被害は、全国各地で深刻化しています。シカ・イノシシの農作物被害の割合は、シカによる被害が41.2%、イノシシが37.1%。獣類の割合としては、実に被害額全体の6割以上に及ぶといわれています。さらにシカは、農作物被害に加えて、森林破壊や生態系への被害が予断を許さない状態にまでなっています。

こういつた被害は農林業に多大な被害をもたらすだけでなく、人的被害や生活環境にまでも被害が及ぶと共に、耕作意欲の減退や耕作放棄地の増加にもつながり、被害額として数字に表れる以上の影響を与えています。

野生動物は本能的に安全な餌場をさがしています。「安全で餌が豊富」という二つの条件が揃うと、結果的にその地域は獣害多発地域となるのです。稲刈り後の2番穂や収穫ロス、収穫しない果樹など人間にとって被害と感じなくても彼らにとっては貴重な餌場が増えています。



各地域では競うように防護柵が設置されていますが、野生鳥獣の生態や効果的な防護柵設置の知識不足のため、無意味な被害防止対策を行っている事例が多く見られます。早急な防護柵の見直しと整備が必要で、近年、農地周辺では耕作放棄地や藪が拡大し、野生動物の隠れ場所が増えています。

耕作放棄地や藪が拡大する背景には、過疎化・高齢化・担い手不足などの深刻な問題があるのも事実です。だが、耕作放棄地は農地への侵入経路や隠れ場所になるばかりか、周囲の農作物に被害が及ぶなど獣害の大きな要因となっています。耕作放棄地や藪をなくすことが、野生動物を農地へ寄せ付け

ない一番の方法ですが、中山間地域における農業の現状を考えると一朝一夕に解決できない課題が山積しています。シカやイノシシを中心とする野生動物の個体数の増加により、環境省・農林水産省が「抜本的な鳥獣捕獲強化対策」を策定し、捕

獲の強化を呼びかけています。被害軽減のためには、頭数目標ではなく被害を出す加害個体や加害群を特定しての捕獲が重要です。この繁殖期は道路を横断することが多く、車との接触事故もよくその時期に起きます。シカのように集団で被害を拡大させる動物を防護するには、防護柵の設置が最も有効ですが、設置経費や管理経費が必要で、費用対効果を無視すれば侵入を全て防ぐ技術はありませんが、設置経費や管理経費を如何に抑えるかということが、獣害対策上無視することの出来ない最も重要なこととです。高齢・過疎化が進む山間地では防護柵の管理が大きな問題にもなっています。

昔は、食糧事情が豊かな現代と違って、イノシシの農作物被害で多くの餓死者が出たこともあります。シカは昼夜問わず、活動と休息を繰り返します。畑など開放的な場所に出るのは夜の方が多いですが、昼間に畑に居るシカを撃つことも多く、電気柵は24時間体制で稼働させるべきです。シカは食べる量も多く、加えて群れをつくって被害を出します。一枚の農地に幾つかの群れ

が侵入し、小さな農地では一晩で作物が全滅という事態が起こることが多々あります。シカは9月下旬～11月上旬が繁殖期です。この繁殖期は道路を横断することが多く、車との接触事故もよくその時期に起きます。シカのように集団で被害を拡大させる動物を防護するには、防護柵の設置が最も有効ですが、設置経費や管理経費が必要で、費用対効果を無視すれば侵入を全て防ぐ技術はありませんが、設置経費や管理経費を如何に抑えるかということが、獣害対策上無視することの出来ない最も重要なこととです。高齢・過疎化が進む山間地では防護柵の管理が大きな問題にもなっています。

増え過ぎたシカ、イノシシは個体調整は欠かすことのできない対策ですが、捕獲による密度の低減には時間がかかり、必ずしも計画通りにいかない場合があり、捕獲や駆除による対策だけではなく、農家や地域住民、そして行政などが連携して、集落に野生動物を寄せ付けない環境を整備するなど、地域全体で総合的な対策に取り組んでいくことが重要だと考えます。

※写真IIシカの皮剥
赤目町龍神山にて

終わりが見えない サル対策

サル対策

全国各地でサルなどの野生動物が急速に増殖して分布域を拡大し被害が深刻化しています。三重県はサルによる農業被害が全国ワースト2で1億900万円に及びます。(2015年調)

被害に苦しみながら、なんとか被害を少しでも減らそうと、さまざまな工夫がこらされています。その中で最もポピュラーなのが「追い払い」です。追い払いは、初歩的な手段で一時しのぎの対策ですが、地域みんなで行うことで効果を上げることができ

ます。一人や二人の追い払いではサルの追い散らしにつながり、群れを他地域へ「追い出す」ことになり、被害地域を拡大させてしまふこともあります。煙火など追い払いグッズを使えば更に効果を上げることが出来ますが、サルは追い払いを通して、一層悪賢くなつていきま

す。追い払いは点的対策であり、結果的に事態を悪化させてきただけのようになっています。点や線ではなく、面で捉えた対策が必要で、どの地域でも格好の隠れ場所のある現在の環境では追い払いは、そこに逃げ込むだけで済むに返ってしまいます。

宇陀・名張市では平成21年からモンキードッグを導入していますが、これも点的対策で、一時期

被害が及ぶことは間違いないでしょう。追い払いには限界があるとするが、近頃、サルなどの野生動物による被害から農作物を守る電気柵「おじろ用心棒」が侵入防止効果が高いと評判を呼んでいます。西日本(兵庫県養父市)で開発された関係で兵庫、三重県、滋賀県などで設置が進んでいます。だが、電気柵は設置するだけでも高価であり、維持費もかかり、管理も大変です。また、高価なため、電気柵を張れる農家とできない農家が

でき、被害は張れない農家の田畑に集中するようになっています。電気柵を張って、田畑からサルの侵入を首尾よく締め出せたとしても、被害が発生している地域のいったいどこまで延々と電気柵を張り巡らしていけば被害を防ぎ切れるのか、道路や急峻な谷底など、電気柵を張れないところは

一つどうするのかなどの問題もはらんでいます。頭の良いサルは、電気柵の構造をやがて理解し、さまざまな手段や方法で隙間を作って侵入を企てることも考えなければなりません。

最後の手段として捕獲が考えられますが、人馴れしたサルの捕獲は非常に困難です。方法は様々ありますが、小型檻による捕獲が一般的です。捕獲に当たっては、被害の原因となっている個体を持定し効率的な捕獲が行えるように計画を立てることが重要です。捕獲による分裂防止のためメスを捕獲した場合は、放逐するよう配慮も必要です。また、犬や猫の誤捕獲にも十分な配慮が必要です。獣害対策で問題なのは、こういった努力を果てしなく積み重ねていった先、たとえ10年後には被害は解消するのか、20年後には解決するのか、全くもって見通すことができないという点にあります。

で家が汚れるなどでツバメの営巣を迷惑と感じる人が増えているようです。近年、ツバメやスズメが減少気味です。軒先のある住宅が減り、巣材の泥が付着しにくい外壁が増え、巣作りが難しくなったことも一つの原因ですが、耕作放棄地の拡大や農薬散布で昆虫が減少したことが主な原因だともいわれています。巣作り場所が少なくなったスズメは、ツバメの巣を横取りするという悲しい事態も発生しているそうです。ツバメやスズメのような身近な生きものを暖かく見守る気持ちを持つ社会にしていきたいものです。

ツバメの巣作り
ツバメの巣作りの季節です。ツバメは台湾、フィリピンなどで冬を越した後、春になると日本に戻ってくる渡り鳥です。農村では益鳥として古くから大切にされ、ツバメを殺したり巣や雛に悪戯する事を慣習的に禁じ、大切に扱われてきました。ツバメは人が住む環境に営巣するという習性があり、人の住んでいない空き家や倉庫などには巣が作られます。昔は巣が作られた家には幸運が訪れるといわれ歓迎したように、人間とツバメは共生関係だったのです。しかし、近頃では泥や糞



おびたしいサルの群れ
名張市上比奈知で

サルの出没が激減した地域もありましたが、現在では飼いの高齢化や、犬の高齢化が進み思うような成果があがっていないというのが実状です。仮に奥山にまで追い上げたとしても、人里が自分たちの棲家と認識している彼らは必ず戻ってきます。サルの寿命は、野生ではおよそ25年といわ

れています。だとすると、20年もたてば、群れのサルのほとんどが入れ替わり、今から生まれの世代が群れの中核を占めるようになり、奥山での生活を知らないサルばかりになり近い将来、被害地域はさらに拡大し、人里のありとあらゆる所でサルが動き回っているという状態になり

市街地にまで



チョット一服

ツバメの巣作り
ツバメの巣作りの季節です。ツバメは台湾、フィリピンなどで冬を越した後、春になると日本に戻ってくる渡り鳥です。農村では益鳥として古くから大切にされ、ツバメを殺したり巣や雛に悪戯する事を慣習的に禁じ、大切に扱われてきました。ツバメは人が住む環境に営巣するという習性があり、人の住んでいない空き家や倉庫などには巣が作られます。昔は巣が作られた家には幸運が訪れるといわれ歓迎したように、人間とツバメは共生関係だったのです。しかし、近頃では泥や糞

で家が汚れるなどでツバメの営巣を迷惑と感じる人が増えているようです。近年、ツバメやスズメが減少気味です。軒先のある住宅が減り、巣材の泥が付着しにくい外壁が増え、巣作りが難しくなったことも一つの原因ですが、耕作放棄地の拡大や農薬散布で昆虫が減少したことが主な原因だともいわれています。巣作り場所が少なくなったスズメは、ツバメの巣を横取りするという悲しい事態も発生しているそうです。ツバメやスズメのような身近な生きものを暖かく見守る気持ちを持つ社会にしていきたいものです。

大量捕獲期（28年1月～3月）以降の出没状況

Table with 12 columns (months H28-H30) and 15 rows (locations: 笠間, 深野, 安部田, 井手, 黒田, 矢川, 星川, 長瀬, 中村, 古大野, 上三谷, 長坂, 宇龍口, 伊竜口, 西谷, 砥取, 室生). It shows the number of captures per month for each location.

※1～2月は捕獲檻周辺に集中。
※捕獲終了後は捕獲地域を避けた行動をしています。
※平成30年末から受信が途絶えています。



名張B群は平成28年、年明けから大量捕獲を実施、同年3月末終了しています。大量捕獲の結果総数7頭にまで減少し消滅状態になっています。もし消滅していたら、間違いなく隣接群が進出してきているだろうし、消滅してなかったら、元の頭数を回復するのは時間の問題。これが大量捕獲後の全国各地の実情です。だが、名張B群は消滅は免れ、リーダーのメスザルがいなくなるなど、群れの社会構造に大きな変化が生じているなかで存在しています。大量捕獲後、28年4月22日、矢川の吉岡正人さんがオトナ5頭と数頭のアカンボを目撃し撮影されています。（写真・下）



日、矢川周辺をパトロールしたところ、矢川区全域で強度の受信がありました。5頭の群れ以外に、発信機装着個体がいると思われず。以降、平成30年末頃までは発信機は順調に作動していましたが、現在では発信は途絶えています。電池切れや発信機装着個体の死亡などが考えられています。電池の寿命は2～3年と言われています。現在では、遊動状況が殆ど把握できない状態が続いています。被害は大幅に減少していますが、位置情報はサルが対策上不可欠です。早急な対応が望まれます。大量捕獲には追跡調査は必須条件です。被害はどの程度減少したのだろうか、頭数を減らした群れのその後の状況など、大量捕獲の効果が是非を検証することが大事なことで、今後の対策にもつながるのです。

名張鳥獣害問題連絡会では、B群エリア全域で聞き取り調査を実施しました。宇陀市檜牧付近で7月初旬1頭の目撃情報。宇陀市古大野では7月末から4～5頭の群れや、ハナレザルが出没している被害が出ています。

今年に入り伊賀竜口や上三谷、矢川にも5～6頭の群れが姿を現しています。B群は、移動状況などは把握できない状態ですが、従来通りの活動をしていると思われるので、従来通りの対策は怠らないようにして下さい。発信機復旧には個体の確保が困難で、長期化が見込まれます。B群エリア在住の皆さんと、サル情報を共有するための情報交換システムを構築出来ないものでしょうか。これには、遊動域が県境をまたいでいる関係上、行政の協力と指導が必要になります。

名張B群の現状

名張B群移動状況

平成31年3月21日～平成31年4月20日

名張A群移動状況

平成31年3月21日～平成31年4月20日



サル情報

名張A群は、青蓮寺湖始めつつじが丘や、ひなち湖周辺に集中的に出没しています。3月上旬までは遊動域全体を遊動し遊動距離は長かったが、最近、特定地域に集中するなど、遊動に変化が見られます。植生による遊動域の変化はありますが、青蓮寺湖の桑の実や、ひなち湖のニセアカシアの花は、まだ時期的に早いです。だが、この行動は「毎年のこと」と、古川さん。また、ハナレは、消息不明とのこと。ニホンザルの遊動距離には季節性があり、夏後半から秋前半にかけて最長で、次いで早春→春後半→初夏の順に長く冬期は最短といわれています。名張B群の情報は依然としてありません。サル情報を共有するための情報交換システムを構築出来ないものでしょうか。